

いくつもの震災詠 佐佐木定綱

震災から五年が過ぎた。ちょうどこれを書いている日が三月十一日である。(ちなみに時評の締め切りは毎月十日だ)

ぼくはバイトしていた店で震災に遭った。店は早めに閉まり、近かったのですぐに帰ることができた。

半ば意図的に震災を歌わずに五年を過ごしてきた。報道されたりネットで見る情報は今までに体験したもののを上回り、うまく認識することができなかった。

スベトラーナ・アレクシエービッチの『チェルノブイリの祈り』は、原発事故に遭遇した人々へのインタビューをしたノンフィクションで、事故から二十五年後の証言を集めたものだ。チェルノブイリ事故は今年で三十年。福島原発事故の五年と比較された特集などもよく見る。ぼくはチェルノブイリ事故と幼なじみである。母親がベラルーシにいたら、ぼくはそもそも存在しなかったかもしれない。

アレクシエービッチは「なにかが起きた。でも私たちはそのことを考える方法も、よく似たできごとでも、体験も持たない。私たちの視力も聴力もそれについていけない、私たちの語彙ですら役に立たない。私たちの内なる器官すべて、それは見たり聞いたり触れたりするようにはできていないんです。そのどれも不可能。なにかを理解するためには、人は自分自身の枠から出なくてはなりません。」

せん。」と言う。彼女はどこまでも人間を見つめている。事故そのものではなく、事故に遭った人々が感じたこと、考えたこと、それらを構築して「なにか」を解き明かそうとする。

彼女が言っているのは「語りえぬものについては、沈黙しなければならぬ」ことなのだと思う。語りえるものの線引きができれば、語りえぬものの形は明らかになる。どこまで語れるのかは語り続けなければわからない。

短歌の世界はこの行為をかねてより言ってきたのだと気づく。短歌を作っていた人も、作ったことがなかった人も。いくつもの震災詠が作られた。

歌壇三月号「震災詠から見えてくるもの——東日本大震災から五年」の座談会は小島ゆかり・梶原さい子・斉藤斎藤・本田一弘の四人で行われた。本田一弘が座談会のキャスティングについて、それぞれの立ち位置の違いに言及している。当事者の梶原、「シンパシーを感じて歌っているところの」本田、「被災者ではないが、心の痛みを持っている」小島、「当事者では歌えないような」部分を意識している斎藤。

短歌は常に個である。他人の目や頭を通してではなく、自分が感じたことを、自己と向き合い、自分の歌える部分を歌う。それがいくつもの集まり、初めて「なにか」を形作るのである。

スベトラーナ・アレクシエービッチの言葉が突き刺さる。

「一人の人間によって語られるできごとはその人の運命ですが、大勢の人によって語られることはすでに歴史です。二つの真実——個人の真実と全体の真実を両立させるのはもつともむずかしいことです。今日の人間は時代の狭間にいるんです。」